

歯科医院があった街角

——近代都市景観の構成要素としての歯科医院の変遷を追って——

竹原 直道

宗像市

戦後の経済的な発展が落ち付きを見せるに従い、日本とヨーロッパ諸国の都市景観の違いが注目されるようになった。すなわちヨーロッパ諸都市がその古い都市景観に保護的であるのに対し、日本では破壊的ないし無関心であることが意識されるようになったのである。そして2006年には都市景観法が公布され、社会的にも都市景観に対する関心が高まってきた。都市景観は個人的な「美的センス」の問題であるとともに、都市の住環境とも関連しており、建築の専門家や行政だけでなく、地域住民の町づくりへのコミュニティ・エンパワメントが求められ、その立場からの発言も増加している。更に都市景観への関心の高まりは、様々な異分野の研究者にも波及し、医療の視点から都市形成史を捉え直そうとの試み（西巻明彦：日本歯科医史会誌29:264-265,2012）も始まった。

一方で庶民の都市景観への関心は、ノスタルジックな箱庭都市＝下町ジオラマの流行現象をもたらした。その影響は例えば「三丁目の夕日」シリーズ、あるいは2012年のNHK朝ドラ「梅ちゃん先生」のオープニング・ジオラマ（山本高樹作）などに見ることができる。そこには今は失われた、理髪店、煙草屋、八百屋、駄菓子屋、下駄屋などとともに、開業医院が下町都市景観の重要な構成要素として用いられていた。本報告では以上のような背景を基に、明治から昭和戦前期までの都市景観を撮影した写真、主に絵葉書資料を材料とし、開業医院の一つとして歯科医院に注目、その変遷を追ってみることにしたい。なお都市景観絵葉書には建物だけでなく電柱広告、広告塔、看板なども写っている。これらの写真も貴重なものと考えられるので合わせて報告する。

各地の歯科医師会のホームページをみると、会の歴史を示す文書のなかに少なからず明治・大正期の歯科医院の写真が掲げられている。しかしその写真の多くは当然のことながら歯科医院の建物に関心が集中していて、周囲の都市景観とともに撮影されたものは意外に少ない。絵葉書の発行は1900年（明治33）に私製絵葉書が認められてからとなるが、歯科医院が写り込んだ明治の頃の絵葉書は貴重である。そもそも歯科医師の数そのものが少なく、丹羽源男ら（日本歯科医史会誌22:65-71,1998）によると、1900年で545人、1912年（大正元）時点で1,531人である。それが1926年（昭和元）になると12,548人、1941年（昭和16）で24,614人となった。大正年間の歯科医師数増加が著しく、この間に約8倍となっている。大まかに時代区分すると、明治末期、大正期から昭和一桁の中頃まで、それ以降戦争の影響が色濃くなる時期とに分けることができようか。以下各時期の特徴を概観してみる。

明治末期の絵葉書には、瀟洒な歯科医院を撮影した建物写真がある一方、いくつかの歯科医院はしもた屋風で、治療用の椅子が畳の上に置かれたりしている。また都市景観絵葉書のなかには、偶然写り込んだ「入歯師」の店があったりして、江戸時代の香りを感じさせる。大正期になると歯科医院の建物のモダン化が進み、平和記念東京博覧会（1922年）で展示された文化村風あるいはレッチワース風というべきか、今日の下町ジオラマの原形ともいえる建物が見受けられるようになる。昭和に入ると戦争の影響が色濃く、歯科医院の写った絵葉書も植民地や占領した大陸の街が多くなる。

以上簡単に概観したが、なにしろ個人的に参考のできた絵葉書は数少ない。今後できるだけ多くの絵葉書あるいは写真を参照しつつ、近代都市景観のなかでの歯科医院の位置付けを探る一歩としたい。